

早稲田大学 文化構想学部
2025年度 入試問題の訂正内容

<一般選抜>

科目：国語

- 問題冊子11ページ: (三) 後ろから1行目 (1箇所)
- 問題冊子14ページ: (三) 問二十三 選択肢八 (4箇所)

(誤) 徐目

(正) 除目

以上

(一) 次のA・Bの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A

幸徳秋水は、大阪の中江家に「玄関番」として過ごしていた日々の暮らしを、「後のかたみ」と題された日記として残している。ここには、来翰の記録や漢詩の習作に加えて、いまだ何ものでもなかった明治の一青年の心模様が率直に記されている。秋水は、このころのみずからの勉強の有様について、以下のような自嘲的な言葉を残している。「予が、必要より読書をなさず、慰みの為にのみ読書をなすは、何時に至るも変らざる可し。予は無論かゝる無益の読書に

I

を費すまじと、我と我身を戒むる事度々なれど、是も一種の病なれば、如何にも諦め付かざるなり。現に

日々六時間余は新聞雑誌に消費し居るなり」。秋水は、ここでいう「新聞雑誌」として「大坂毎日新聞、東雲新聞、大坂公論、鶏鳴新報、京都日報、讃岐日報、国民之友、経世評論、社会灯」等の名をあげている。併せて秋水は、当時それが格別好んでいた書目として、以下のようなものをあげている。「古文真宝、東萊博議、孟子、荀子、法華経、遠羅天釜、白詩選、唐詩選、金聖歎評三国志、燕山外史、情史抄、古今集、徒然草、太平記、平家物語、盛衰記、日蓮大士真実伝、靖献遺言、八犬伝、弓張月、頼蒙怪鼠伝、夢想兵衛、娘節用、梅曆、春の屋著作書生氣質・細君他数種、あひさき、浮雲、無味氣、蝴蝶、近松著作全書、院本数種、謡曲数種及膝栗毛、浮世風呂」。このリストには、漢籍も含まれているものの、日本の伝統文学、物語、小説がその半ば以上を占めている。前述の新聞雑誌に加え、こうした和文の物語・小説が、

II

なす読書の対象となっていたと考えられる。

中江兆民の最初の教育は、情念と知的好奇心で膨れ上がったこの無軌道な青年の読書に、一定の方向性を与えることであつた。この点で興味深いのは、秋水が、兆民が深く漢籍に親しんだ時期を、フランス留学後のこととして記録していることである。記録によれば兆民は、明治十一（一八七八）年頃、高谷龍洲の済美塾、明治十三（一八八〇）年に三島中洲の二松学舎ならびに岡松麁谷の紹成書院で漢文を学んだ。兆民はこのころ、仏学塾を主催しながら、文部省からの委嘱でフランス語の翻訳を継続的におこなっていた。このようにみるならば、兆民における漢籍と外国語との関係は、漢籍の素養の上に外国思想を受容したというようものではなかったことが理解される。兆民はむしろ、フランス語の翻訳と漢籍の学習を、同時並行的にすすめていった。外国語の学習と漢籍の学習は、相互依存的なカリキュラムとして構想されていたのである。

では、なぜ外国語と漢籍なのか。この興味深い組み合わせについて、兆民は秋水に、以下のように解説している。

先生予等に誨へて曰く、日本の文字は漢字に非ずや。日本の文学は漢文崩しに非ずや。漢字を用ゆるの法を解せずして、能く文を作ることを得んや。真に文に

III

ぜんとする者、多く漢文を読まざる可からず。且つ世

間洋書を訳する者、適當の熟語なきに苦しみ、妄りに疎率の文字を製して紙上に相ひ踵ぐ、拙悪見るに堪へざるのみならず、実に読んで解するを得ざらしむ。是れ実は適當の熟語なきに非ずして、彼らの素養足らざるに坐するのみ。思はざるべけんや。

つまり兆民は、洋書の翻訳にあたり、新しく熟語を案出しがちな当時の風潮に対し、漢籍のなかから適切な用語を見いだすことの必要性を述べているのである。ではなぜ、日本語への翻訳に漢籍を経由する必要があるのであろうか。この点について秋水は、兆民の文が、「博く仏典語録を涉獵し」たうえで成りたつたものであることに、あらためて注意を促している。そもそも仏典とは、サンスクリットで書かれた經典を漢語に翻訳したものである。經典にある思惟語・觀念語を翻訳するために、漢語は、そうした思惟語・觀念語の語彙を豊富に蓄積することになった。兆民は、そうした語彙が西洋の同種の言葉を日本語に翻訳する場合に参考となると考えていたわけである。

明治初期の啓蒙的知識人たちが、日本語のボキャブラリーには存在しなかったさまざまな西洋の概念を翻訳するにあたり、創意工夫を重ねながら新しい熟語を創りだしていったことに關しては、すでに多くの指摘と研究が存在する。そのただなかであつて兆民は、漢文という世界そのものが、そうした翻訳語の創出という作業と共に成立してきた事実、あらためて注目を促しているのである。兆民の漢籍への着目は、特定の著者やテキストへ向けられたものではない。それはいわば、つねにすでに、翻訳という実践と共に変容し成長してきた漢文世界そのもののへの信頼と敬意であつたからである。

かくて兆民は、ルソーの『社会契約論』を、「読んで解する」日本語にするために、漢文で訳さねばならなかったのである。しかしいかに「日本の文字」が漢字であり、「日本の文学」が漢文崩しであるにせよ、漢文と日本語のあいだにはいまだ距離がある。その距離を埋める作業が「作文」であつた。では、兆民にとって「作文」とは何を意味したのであろうか。ここにおいて注目すべきは、兆民が漢文を学んだ岡松麁谷の私塾での重要なプログラムが、『訳常山紀談』の作成であつたことである。このプロジェクトのはじまりを、麁谷は、その自序にて次のように記す。

「余都に入りて自り、諸生の業を受けんことを請ふ者有り。必ず先づ以て記実の法を授く。文簡（帆船万里の諺号）先生の遺教に従へるなり。³中江子篤之を見て喜びて曰く、子の法に循へば、東西言語同じからずと雖も、未だ写すに漢

文を以てす可からざる者有らざるなり。遂に二三子と与に謀り、常山紀談を取りて、相ひ伝へて之を訳す。余も亦た極力刪定す。已に成るや、彙めて十巻と為して、以て後進の士に便にす。相ひ繼いで門に及ぶ者則を取るなり」。

『常山紀談』とは、江戸中期の岡山の儒者、湯浅常山によって書かれた戦国時代から江戸時代初期までの武将たちの

逸話を集めた文集である。すなわち『訳常山紀談』とは、和文で書かれた叙事文を漢文に翻訳するプロジェクトであった。

兆民の「作文」は、被翻訳語としてのフランス語と翻訳語としての日本語を、ともに漢訳するという修練をへて準備されていた。外国語を漢訳することで、漢語世界に埋め込まれている抽象概念の潜勢力を掘り起こし、あわせて和文を漢文のフィルターで濾過することにより簡潔で勢いのある日本語へと凝縮していくこと。「経国」を目標に掲げた兆民の「文章」は、このような修練の果てに到達されるべき目標であった。

秋水が中江家に寄宿していた明治二十三（一八九〇）年を前後する時期は、新しい日本語の文体が創出される画期となった時期でもあった。坪内逍遙の問題提起（『当世書生気質』、『小説神髓』明治十八年～十九年）を皮切りに、二葉亭四迷の苦闘に満ちた試行錯誤（『浮雲』明治二十年～二十一年、『あひまき』明治二十一年）を経て、明治の小説家たちが、いかにして、東京の話し言葉（口語）を基準とする新しい書き言葉（言文一致体）を創造していったのかについては、すでに多くの研究がなされている。兆民が亡くなる前年の明治三十三（一九〇〇）年には、帝国教育会内に「言文一致会」が創設され、翌年には「言文一致の実行に就ての請願」が国会に提出され、可決されている。野村剛史によれば、言文一致体は、明治三十三年には公表される小説の過半に達し、明治四十（一九〇七）年頃にはほぼ小説界を完全制覇したとされる（『日本語「標準形」の歴史」）。

では、こうした新しい日本語の創出において、兆民によって追求された「作文」は、いかなる位置を占めるものであったのであろうか。齋藤希史は、口語体による小説の成立を重視する伝統的な文体論に対し、漢文訓読体（『普通文』『今体文』）の成立と発展が、現代口語文への道を開いたとする興味深い指摘を行っている（『漢文脈と近代日本』）。その際齋藤は、漢文という文体には、表現媒体としての機能性と歴史Ⅱ自己認識にかかわる精神性という二つの焦点が存在することに注意を促している。前者は、異言語への対応力や造語力の高さといった漢字漢語の特質を示しており、後者は、士大夫の言語としての漢文を古典文として読み書きするうちに、否応なく身にまとう歴史と社会への規範的な関わり方、つまり士人的エトスを示している。漢文を学ぶことは、こうした構造をもつ中国古典の知的世界に自分自身を参入させることを意味していた。

ここで重要なのは、齋藤が、明治初期に氾濫する訓読体の特質を、造語機能の活用と士人的エトスの消去に見いだし、漢文の世界からの離脱のプロセスとして分析している点である。⁴兆民と秋水の「作文」修行は、こうした訓読体を通じて漢文世界からの離脱が一般化しつつあった時代の只中で、敢行されていたことになる。たしかに一面でこれらの「作文」修行が、齋藤がいうような「漢詩文的なるものから離脱することによって、もしくはそれを否定することによって、あるいはそれと格闘することによって成立した」日本の近代へと向かうひとコマであったことは疑いえない。それは兆民の漢文修養の主たる目的が、中国の古典籍に埋没することではなく、日本の経験や現実を簡明に記述しうる「叙事文」の作成にあったことから明らかであろう。近世の和文を漢文に翻訳する『訳常山紀談』のプロジェクトは、伝統的な漢文教育のカリキュラムからは逸脱していた。むしろその背景にあったのは、明治政府で公式文として採用された漢文訓読体（『普通文』『今体文』）の学習需要である。和文を漢文に直す練習は、漢文訓読体に習熟するための方法でもあった。その意味で、兆民の漢文作成もまた、伝統的漢文世界からの離脱の徴候とみなされうる。しかし他方で、兆民の場合、そうした脱漢文化が、訓読体ではなく、漢文そのものの作成を通じておこなわれたこともまた事実である。それは兆民が、どれほど深くこの漢文という世界に、その身を浸していたかの証左でもある。兆民を漢文世界につなぎ止めていたもの、おそらくそれは同時代の訓読体から消え去りつつあった士人的エトスではなかったか。そして秋水もまた、兆民のうちに「文士」の姿を見いだすことにより、そのエトスを受け継ぐとしたのである。

（梅森直之「秋水の兆民、兆民の秋水」による）

B

翻訳で文名を売る位ズルいことはない、他人の思想で、他人の文章で、左から横に書いたものを、右から縦に器械的に引直すだけの労だらう、電話機や、写字生と大して相違する所はない、と語る人がある。少しも翻訳をしたことのない人、殊に外国文を読まぬ人にコンな考へを持つ者が多い。

是れ大なる謬りである。思想は別として、単に文章を書く上から云へば、翻訳は著述よりも遙かに困難である。少くとも著述に劣る所はない。少く責任を重んずる文士ならば、原著者に対し、読者に対し、其苦心は決して尋常のものではない。

翻訳には第一に原文の意義を明瞭に理解せねばならぬ。然るに是が困難だ。外国で育った人の外は英米人自身が英文を解し、日本人自身が日本文を解するが如くに、完全に外国文が解される者ではない。非常な学者先生でも何処かに首を傾げねばならぬ個処に出くわすのだ。初め一通り読んだ時には立派に解つて居た積りでも更に筆を執つて一字一句と逐ふて行くと、幾何も不安な怪しげな処が顕はれて来る。若し大部な書籍などになると、一字一句も誤謬なく完全に訳さるゝといふことは、殆ど望む可らざることである。是は予が洋学の素養不足の為に独り斯く感ずるのみでなく、孰れ（じつ）の老大家でも同様だと聞いて居る。⁵而し夫だから誤謬は仕方がないとして許す訳には行かぬ。無論出来得る限りは一個の誤謬もなきことを力めねばならぬ。是れ第一の困難である。

けれど兎に角翻訳を思ひ立つ以上は、原文は十分に解し得られる、自国文を読むが如くに咀嚼し得たものと仮定しても良いが、さて書き出すと、直ぐ今度は訳語撰定の困難が来る。原文の意義は十分に解つて居ても、此意義を最も適当に現はし得る文字は、容易に見つかるものではない。余程文字に富んだものでも囊の物を探るやうには行かぬ。其苦心は古の詩人が推敲の二字に思ひ迷つたのと少しも異なる所はない。其処で負惜みの先生は、どうも日本語や漢語は、適当な熟語に乏しくて困るとつぶやく、其実熟語に乏しいのではなくて、其人の腹笥が乏しいのだ、と故兆民先生は語られた。故思軒居士や、鷗外君などの翻訳の自在なのは、彼等の文字に富むてふことが有力な武器であるに違ひない。

普通に用ゐられる単語熟字で、訳語の一定して居るものは仔細ないが、或る専門語、術語などで未だ訳語の極まらぬ者に出会つた時の苦心は一通りでない。予が是れまで二三の社会主義書類を訳したのでさへ、随分悩んだことがある。例せば彼の社会党が多く使用するブルジョアジー (Bourgeoisie) てふ語の如き、是れ迄或は中等市民と訳し、或は資本家、或は富豪、或は紳商など、訳して見たが、如何しても社会主義の所謂ブルジョアジーの意義を完全に顯すことが出来ぬ。予は数年前堺枯川と『共産党宣言』を訳した時、兩人で種々に相談した末に、遂に「紳士閥」と訳することに折合つた。固より此に紳士といふのは、ゼントルマンの如き立派な意味ではなくて、日本語に所謂紳士、即ち旦那連の意味に過ぎないので、能く労働者に対する中流以上の階級を代表し得たと思ふ。

適当な訳語が出来ると、其を忠実に原文の字句を逐ひ、一節、一段の順序に随ひ器械的に並べて、翻訳は出来るのであるかといへば、是れでは文字を並べたのみで決して文章を為すことは出来ぬ。完全な翻訳は其意義を明かにするのみでなく、其文勢、筆致をも写さねばならぬ。其原文の軽妙なるは軽妙に、流麗なるは流麗に、雅健なるは雅健に、滑稽なるは滑稽に伝へねばならぬ。然るに余りに忠実に原文の字句を逐はんとすれば、筆端窘束して訳文は丸で其生命を失つて了ふ。訳文をして原文の如き文勢筆致を保たんとせば、原文の字句を勝手に増損し、前後を倒置するなどの必要を生ずる。是れ実に責任ある翻訳家の進退両難とする所である。昔、三蔵法師も、經文の翻訳には余程テコズつたと見えて、翻訳は猶ほ食物を嚙碎いて其子に食せるやうなもので、美味は母親の舌に残つて、子は糟粕ばかり食ふことになると思ふ。

文勢筆致に注意しない人の翻訳は、文章晦渋にして殆ど読むに堪へぬ。

「V」

翻訳は反逆なりといふ西人の言葉があるが、文章の晦渋なのも、原意を勝手に改作するのも、全く原著者に対する逆と言つても良い。

兆民先生は曾て、ユーゴーなどの警句を日本語に訳出して其文勢筆致を其儘に顯はさうとすれば、ユーゴー以上の筆力がなくてはならぬ、総て完全な翻訳は、原著者以上に文章の力がなくては出来ぬと語られた。兆民先生は斯く信ずるが故に、科学、理論の書は多く訳したけれど、文章に重きを置くべき文学の書には手をつけなかつた。

併し文章を主としない學術理論の書でも、兆民先生は極めて雄健明快の文章を以て之を訳して、毫も斧鑿の痕を止めなかつた。之と同時に亦た原文の字句にも極めて忠実であつた。若し原語の意義にして少しく明瞭を欠く所あれば、常に訳者不学にして解する能はず云々と一々明白に断り書きして残し置き、苟くも良い加減に糊塗して置くやうなことはなかつた。是れ翻訳家として元より当然の義務ではあるが、今日のペダンチックな才子連の到底為し能はざる所である。

(幸徳秋水「翻訳の苦心」による)

問一 空欄

I

と

III

とに入る最も適切な語の組み合わせを次の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

I I金子・III献

II I歳月・III安

III I光陰・III長

IV I学力・III肯

V I体力・III信

問二 空欄

II

に入る最も適切な五文字の語句を本文Aの最初の段落の中から抜き出して、記述解答用紙の所定の箇所に記せ。

問三 傍線部1「一定の方向性」とあるが、この語の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

答欄にマークせよ。

I 日本の伝統文学、物語、小説を中心に勉強すべきであるという方向性。

II 博く仏典語録を渉獵して翻訳の際に参照すべきであるという方向性。

III 日本の文学と欧米の文学とを相互依存的に勉強すべきであるという方向性。

IV 欧米の外国語と漢籍の学習とを同時並行的に学習すべきであるという方向性。

V 漢籍の豊富な素養の上に外国語の思想を受容すべきであるという方向性。

VI 『古文真宝』、『東萊博議』、『孟子』、『荀子』といった漢籍を重視する方向性。

問四 傍線部2「漢文という世界そのものが、そうした翻訳語の創出という作業と共に成立してきた」とあるが、この説明として、Bの文章に基づく左の選択肢の中から最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ Bourgeoisieという語を訳した「中等市民」「資本家」「紳士閥」などの漢語が、伝統的な漢文に取り込まれることで古めかしい漢文世界に新しさを加えたこと。

ロ Bourgeoisieをブルジョアジーと音訳するのではなく、漢字を用いて新たに「紳士閥」という訳語を作ることで、広い意味での漢文世界に新たな役割を与えたこと。

ハ Bourgeoisieに対する「資本家」「富豪」などの新しい翻訳語を、西周、森鷗外、堺枯川らが、近代日本にふさわしい漢語として成立させたこと。

ニ 文勢筆致に注意して原文の軽妙さや流麗さといったニュアンスまで訳出できる言語的感覚の鋭さを持つことで、漢文の力を高めることにも繋がったこと。

ホ 翻訳では何よりも原文の意義を明瞭に理解しなければならぬので、それが漢文の論理構造を正しく理解することにも寄与したこと。

問五 傍線部3「中江子篤之を見て喜びて曰く、子の法に循^{したが}へば、東西言語同じからずと雖も、未だ写すに漢文を以てす可からざる者有らざるなり」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。なお、この部分の原文は「中江子篤見之喜曰、循子之法、雖東西言語不同、未有不可写以漢文者也」となっている。

イ 中江先生は熱心に『常山紀談』を見て喜んで言った、先生に従って語法を決めれば、関東と関西とで方言に違いがあってもすべての日本語の文献で漢文に翻訳できないものはないのだ、と。

ロ 中江先生は記事文の書き方を目にして喜んで言った、先生の学習法に従うまでは、日本と欧米の言語とはあまりに異なるので、安易に漢文に翻訳してはならなかったのだ、と。

ハ 中江先生は何度も外国語と和文とを漢文に直す方法を見て喜んで言った、先生に従って漢文を学んでも、露西亜と欧米とでは言語が異なっているので、すべてを漢文に翻訳することは出来ないであろう、と。

ニ 中江先生は和文を漢文に直す方法を見て喜んで言った、先生の記事文の書き方に従えば、欧米と日本とは言語が異なっている、必ず漢文に書き直せるであろう、と。

ホ 中江先生は英語や仏語を漢文に直す方法を見て言った、先生に従って語法を学べば、関東と関西とでは方言に違いがあってもすべて同質の漢文に翻訳できる、と。

ヘ 中江先生は『訳常山紀談』を熟読してから微笑んでこう言った、先生の方法を真似したとしても、欧米と日本とでは言語が異なるので、すべての文章を漢文に直すわけにはいかない、と。

問六 傍線部4「兆民と秋水の「作文」修行は、こうした訓読体を通じた漢文世界からの離脱が一般化しつつあった時代の只中で、敢行されていたことになる」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 彼らの修行の目的は西洋の概念を受容できる近代的な日本語を作り出すことにあり、その意味では士人的エトスの修養を伴う漢文学習によって精神的な受け入れの土壌を涵養しようとしたということ。

ロ 彼らの修行の目的は洗練された日本語文の作成にあり、その意味では漢文的世界からの離脱とも言えるが、士人的エトスと関わる漢文に深く親しむ姿勢を貫いたということ。

ハ 彼らの修行の目的は伝統的漢文世界を象徴する士人的エトスからの脱却にあり、その意味では翻訳を通じた近代的な漢文訓読文の修養こそが、時代的な要請に合致していたということ。

ニ 彼らの修行の目的は中国古典の知的世界に自分自身を参入させることであり、その意味では漢文そのものを作成するという取り組みこそが、西洋化に対抗しうる手段だったということ。

ホ 彼らの修行の目的は経験や現実を記述しうる新たな文体を作り出しながらも同時に士人的エトスを受け継ぐこととするものであり、その意味では両義的な危うさを持つということ。

問七 傍線部5に「第一の困難」とあるが、「第二」という言葉は見当たらない。この点について説明するものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ ここでは「最も困難なこと」として「第一の」と言う言葉が使われているのであって、論点を示していると思われるべきではない。したがって、「第二の」などの言葉は書かれていない。
- ロ ここでは二つのことが取り上げられている。「第二の」という言葉はないが、これは論点が「第一の困難」としての原文読解ができたとして「仮定」した上での議論であることによる。
- ハ 論点の最初の切り口として「第一の」という言葉が使われているが、続く二つの主要な論点は相互に関連付けられて述べられており、全体として三つのことが具体的に書かれている。
- ニ 「第二の」という言葉は書かれていないが、段落ごとに翻訳の困難さが論理的にまとめられており、「兆民先生」に焦点を当てた終わりの段落を含め、論点としては四つのことが書かれている。
- ホ 「第二の」「第三の」などという言葉は書かれていないが、段落の構成と論点は緊密に関わっており、翻訳の困難さと言える内容が、具体例と共に五つの論点として書かれている。

問八 次は、傍線部6「其処で負荷の違ひない」についての、大熊さんと小熊さんとの会話である。「X」にくる内容として、もっとも適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

大熊さん…「訳をする場合の言葉の問題については、Aの文章にも書かれていますよね。」

小熊さん…「そう、おもしろいですね。Bの文章での『文字に富む』とは、Aの文章ではどういうふうに書かれていると考えるたらいでしょうか？」

大熊さん…「X」

小熊さん…「そうですね。それはAの文章にある兆民の教育方針にも関連していますね。」

イ 外国語の翻訳を通じて漢籍や仏典に含まれる観念的な語彙に光を当てることによって、漢語世界に埋め込まれている抽象概念の潜在力を掘り起こせば、簡潔で勢いのある標準語が作れるということでしょうか。

ロ 兆民は「経国」を目標に掲げて文章の修練をしているので、漢文に広く触れ伝統的な漢文訓読体に習熟することによって、士大夫的なモラルが身につくということを構想しているということでしょうか。

ハ 漢字漢語は異言語への対応力や造語力の高さといった特徴を持っているので、仏典や漢籍などを広く読み漢文の素養を身につけておけば、外国語の抽象的な観念を翻訳するときに役立つということでしょうか。

ニ 兆民は洋書の翻訳にあたり新しく熟語を案出しがちな当時の風潮に対して批判的で、漢籍の中から適切な用語を見出せば、伝統的な教養が身につけられるということでしょうか。

ホ 「日本の文字は漢字に非ずや。日本の文学は漢文崩しに非ずや」という信念に基づいて、日本の伝統文学や物語よりも漢籍や仏典などをこそ読書の対象とし、外国語の翻訳に備えなさいということでしょうか。

問九 空欄Vには、次のイ～ホの文が入るが、原文通りに正しく並べ直した場合に、四番目に来るものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 是れは文芸家の中にも少なくないといふことだ。

ロ 是等は独り読者の迷惑のみならず、原著者に対しても実に不都合の極である。

ハ 文芸家とか小説家とかの翻訳にはマサかに左程なのはないが、科学者の中には、博士学士の名を冠するのにも、往々文章にも何にもならぬのがある。

ニ 然るに之と反対で、文章は頗る流麗巧妙に出来てゐるが其癖全く意義を取違へて居る、若くは意義を解し得ない処をば、ドシドシ省略し、或は勝手に改作して前後を繋ぎ合せて置き、原書と照し合せねば、少しも省略改作の痕跡が分らぬ程に、其文才で瞞化すのがある。

ホ 読んで面白くないばかりでなく、實際其意義を解することすら出来ぬ恐れがある。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

毎日通る駅の構内の壁などに、並べて貼ってある大判のポスター。風光明媚な観光地の写真などをあしらったそんなポスターの、画面の隅の方に目をやれば、そこには小さく「写真はイメージです」と書いてある。最近では「画像はイメージです」の率も増えた。そのたびに「あー、せちがらい」とため息をつきたくなる。この文の本当の意味が「写真の見える実際とは異なっていることがあります（ので、クレームはご遠慮下さい）」だからだ。

「写真はイメージです」は、よく考えれば I である。仮に「The picture is an image」などと英語に直訳してみれば、これは詩なのか冗談なのか、何が言いたいのか分からないような立言になる。フランス語の場合には「picture」にあたる語が存在せず「image」という語で済ませているので「L'image est une image」となるだろう。循環論法というやつだ。「そりゃそうだろう」とツッコまれてしまうような。

II

「表象」という別の言葉がある。どこかしっくりこない日本語だが、ドイツ語の「Vorstellung」からの翻訳語だと聞いている。「前に置く」という意味らしい。英語や仏語でそれに当たる言葉は「repre(s)entation」になる。「再びあらしめる」という意味だ。フランス語会話では人の話が頭の中でうまく像を結ばない時などに「ちよつとうまくルプレザントできない」という風に使う。日本人なら「うまくイメージできない」と言うところだろう。

いま目の前にあるもの（present）を、そのまま誰かに見せることがむずかしい、といった場合がどこにでもある。こんなことは人類史の始まりの頃からあったはずで、たとえば森の中で怖ろしい動物に初めて出くわして、慌てて逃げ帰った人が仲間とその動物のことをなんとか説明しようとする、なんていう場合。ケンメイにその時の様子を言葉で説明したり絵に描いたり動作や鳴き声の真似をしたり、と。あれが「representation」＝表象のそもそでもあったはずだ。なにかを再現したり、なにかの代わりを作ったり。やがてこの言葉は、劇などの上演、演出。政治の場面での代表者、代理人。図や絵や記号、像や彫刻。はては想像力から概念作用と、さまざまな意味を持つ大きな言葉になった、のだから。

ところでわが日本語の「表象」の「象（かたどる）」という漢字は、もともととはベタに、あの動物の象のことだったという。ゾウは最も目だった大きいかたちをしているところから、古代の中国ではその象形文字が、姿や形という意味に転じて用いられ始めたのだという。

まず現実のゾウがいる。遅れて「象」がつくられる。「表象」はいつも現実の出来事の後にかたちづくられ、現実を追いかけたり、背後から指し示したり、懐かしむために保管されたり、持ち運ばれたり人に分配されたりする。

この現実と表象との III の中に展開するありとあらゆる夢のことを、人は「イメージ」と呼んでいるのだと、個人的には理解している。現実でも表象でも、可視でも不可視でも、文字でも音楽でも、真だろが贋だろが、もしいま自分の夢にかたち（一匹の象？）を見ているなら、それ即ち「イメージ」であると、断言したくなる。

あるいは。「写真はイメージです」の「イメージ」という語でポスター制作者がじつさに伝えたかったニュアンスとは、たとえば漢字の「例（たとえる）」の持つ意味のようなものだったのかもしれない、とも思う。よく料理写真に「盛り付け例」という言葉が添えてあることがあるが、あの「例」だ。

語源的には「いくつにも切り裂けば同類のものが並ぶようになる」（『漢字源』）というブツソウ²なものらしいが、たしかに料理の盛り付けは、ひとつの料理といっても素材の見た目や器の違いやら、その時々で異なるものになってくる。そのすべてをいちいち表象する作業は、はっきりとムダと言え、だから「同類のものが並ぶ」中から一つを選んで、残りのすべてを代表させた方がよいことになる。観光ポスターの場合で言ったら「光景例」とでも書いておけばよいのか。考えてみればこれは、記号のはたらきと同じだ。

なまなましく不定形なものとしての「イメージ」は、忙しい生活の中でこうして記号としてまとめられ始め、その無辺さや無量さは縮約され、他の記号と共に体系化され、集団内相互の意思疎通や感情の共有のために使われ始める。

「例」だけが辞書の項目のように並ぶ世界の中で、その辞書の分厚さに圧倒されつつ、やがて人が記号の操作の方ばかりに夢中になる頃には、それがあの「イメージ」であったことなど忘れられてしまっているに違いない。山の紅葉や桜の撮影に熱心な人々のように、記号を美しく磨き上げるといった作業も、それはそれで大事なものはあるのだけれど。写真の仕事はよく「イメージ・メイキング」などと言われたりもする。しかし個人的な実感としては、それはイメージをつくる仕事、というよりもむしろ、イメージが生まれたり大きくなったりすることに手を貸す仕事、といった方が正確な気がする。

それはたとえば、慎重に光学機器を操作することだったり、照度や照明比に気をつけることだったり、フィルムが現像されてくるのを待ちわびることだったりする。もし暗室作業経験者なら、目の前で像が、つまりイメージが、ジワジワと成長する姿に感嘆の声を上げたこともあるだろう。なにより「像が写っていない！」ということが間々ある。そのような経験の最中に、イメージを「つくる」などという台詞は、頭に浮かびやうがない。

IV であれ、縮約され記号として整理されてしまったものであれ、イメージはそこかしこに在る。その茫洋とした拡がりや「豊かさ」として喜び、そこにある小さなひとつを拾い、それをもっと確かなものになるように、手を

貸し育てること。このイメージが僕たちの世界を確かに構成していたのだと、まるで冒険家のように人々に笑顔で報告すること。写真の仕事とは昔も今も、これに尽きると思っている。

イメージ、つまり「現実と表象との」Ⅲの中に展開するありとあらゆる夢」のために、その夢を大きく育てるために、まずもって必要とされるものは「時間」だ。冒険のために必要なものが、あるいは農夫が野菜を育てるために必要なものが「時間」であることと、事情は似ているかもしれない。たとえ極少であっても、せめて僕たちの知覚や意識や記憶が、フィジカルな意味で自由に動き回るための時間くらいは、この夢のために、どうしても必要だ。

(畠山直哉「写真はイメージです」による)

問十 空欄 Ⅰ に入る最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 真っ赤な嘘
- ロ 自然の理
- ハ 論理的帰結
- ニ 謎の言葉

問十一 空欄 Ⅱ の段落は次の①～⑥の文から構成されるが、その並べる順序として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ① しかしこれではおかしい。
- ② では「写真は心象です」と言い換えることにしたらどうか？
- ③ 写真はむしろ「心象」の外部にあるイメージとして、永く愛されてきたという歴史を持つものなのだから。
- ④ 僕ら日本人の使っているカタカナの「イメージ」という言葉が、英語の“image”から来ていることは確かだろう。
- ⑤ そこにあるのは写真、つまりレンズを通して定着された外界の像であって、「心象」とは呼び難いものなのだから。
- ⑥ 明治以前の日本にはなかった言葉のはずなのだから、と『広辞苑』で「イメージ」をひいてみればそこには「心の中に思い浮かべる像。全体的な印象。心象」とある。

- イ ④↓⑥↓②↓①↓⑤↓③
- ロ ⑥↓④↓②↓⑤↓①↓③
- ハ ②↓⑤↓③↓①↓⑥↓④
- ニ ⑥↓①↓③↓②↓④↓⑤

問十二 二つの空欄 Ⅲ には同じ語句が入る。二つの空欄に入る最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 永く愛されてきたという歴史
- ロ どこかしっくりこない日本語
- ハ 時間的先後関係
- ニ 集団内相互の意思疎通

問十三 傍線部 A「考えてみればこれは、記号のはたらきと同じだ」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ ポスター制作者は、指示される対象が抽象的で難解な場合に、より理解しやすい社会の慣習や約束事になぞらえた表象を生み出し、指示される対象の意味をずらしていくから。
- ロ ポスター制作者は、指示することが不可能な対象を、社会の慣習や約束事が許す範囲内の表現に代替させて、その対象の意味内容を変容させるから。
- ハ ポスター制作者は、無数にある表象からそのポスターで指示したい対象について一つの表象を選択し、その選択した一つの表象で指示したい対象の意味内容をすべて代表させようとするから。
- ニ ポスター制作者は、指示したい対象の例を集めた辞書の項目から適当なものを選び出し、その例が指示したい対象の実像と合致せずともかまわないとするから。

問十四 空欄 IV に入る最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 観光地の写真をあしらったポスター
- ロ なまなましく不定形なもの
- ハ「例」だけが辞書の項目のように並ぶ世界
- ニ 現実の姿形をかたどった象形文字

問十五 本文の趣旨と合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 現実と表象のあいだに生まれるイメージをより確かなものにするためには、手を貸し育てるための十分な時間が必要だと筆者は考えている。
- ロ 一般的にイメージを作り上げることが写真の仕事だと考えられているが、筆者はイメージの生成を手助けすることこそ写真の仕事であると考えている。
- ハ 表象とは常に事後的に作り上げられるものであり、何らかのかたちで現実を再現したり、代替となるものを生み出すことだと筆者は考えている。
- ニ 茫洋とした世界の中からイメージを拾い上げることこそが大切であり、記号の操作ばかりになってしまったイメージに価値はないと筆者は考えている。

問十六 傍線部 1・2 のカタカナの部分の漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記せ（楷書で丁寧書くこと）。

(三) 次の甲・乙・丙・丁の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

甲「次の文章は、倉本一宏『一条天皇』（二〇〇三年）の一節である。出題の都合上、途中の文章を省略した箇所がある。」

一条天皇に対する後世の評価を見てみたい。『左経記』や『春記』など一世代後の古記録にも、「一条院の御時、……」とか、「寛弘の例に依り、永く恒例と為す」などといった文言が数多く見られる。この時代、すでに一条の時代が儀式や政務運営の範（「寛弘の佳例」）とされていたのであり、これは中世の古記録にまで受け継がれることとなる。一条の皇子である後朱雀天皇がしばしば「I」の咎（よが）を嘆いているのも、その裏返しであろう。

もう一世代後の『為房卿記』康和五年（一一〇三）正月十六日条は、鳥羽天皇の誕生を記したものであるが、そこには、「一条院 申日に誕まる。当院、欠日に誕まる。今日、没日に誕まる。代々の聖主、悪日に降誕するか」という記述が見える。一条が白河院と並んで、すでに「聖主」と認識されているのである。後冷泉以降の天皇の多くが、一条（懷仁）と共通する「仁」を諱（いみな）に持つのも、その表われであろうか。

ここでは、古代末から中世にかけて成立した説話集のうち、一条の人間像に触れているものを抽出し、かかる説話が、どのような背景のもとに成立したのかを検討する。

まず、大江匡房による往生伝で、康和三年から天永二年（一一一一）にかけて成立したとされる『続本朝往生伝』に見える一条像を見てみたい。その第一話「一条天皇」が一条に関わる説話であるが、五つの部分からなっている。一つめは一条の系譜、経歴、特に詩文と笛の優れた資質を語っている。笛の才能を示す例として挙げられた円融寺行幸については、簡略化したものが『続古事談』にも見られる。

二つめは一条朝における各方面にわたる人材の輩出を語ったものである。「時の人を得たること、またここに盛となせり」とし、親王（具平親王）・上宰（道長・伊周）・九卿（実資・齊信・公任・俊賢・行成・扶義・惟仲・有国）以下、雲客（殿上人）・管弦・文士・和歌・画工・舞人・異能（相撲人）・近衛（隨身）・陰陽・有験の僧・真言・能説の師・学徳・医方・明法・明経・武士と八十六人の人名が列挙され、「皆これ天下の一物なり」と総括されている。九卿の箇所「朝には廊廟に抗議（議定）し、夕には風月に預参したり」とあるように、安定した政務運営と盛んな文芸の両面からの評価と言えようが、これらが後世の聖代観につながっていく。人材の輩出については、『十訓抄』にも見える。三つめは拝謁の際の一条の様子を語ったものである。齊信が拝謁した時は、「先づ天下を淳素に返すべきの勅命」があったので、齊信は私心を抑えたというのである。淳素とは II ことであるが、一条が儉約令を頒発したこと

の反映であろうか。道長が一条に毎日玉饌（食事）を奉つていたという記載が続く。四つめは藤原為時の越前守任命に関する説話である。（中略）この除目は長徳二年（九九六）のものであり、藤原為時と源国盛の任国が交換されたことも史実であるが（『日本紀略』長徳二年正月二十八日条）、実際にはこのような理由で国替えが行われたわけではなく、前年九月に到着していた宋国人との折衝にあたらせるために為時を越前守に任じたものとされる。一条が詩文を好んだということから作られた説話であろう。『今昔物語集』や『古事談』にも見える。

五つめが、いよいよ一条崩御の際の念仏と蘇生に関する説話である。慶円が、「必ず最後の念仏を唱へしむべし」という生前の約束を果たす前に一条が崩御してしまったと嘆いたところ、院源が慶円とともに蘇生術を施し、一条は蘇息した。慶円が念仏百余遍を唱えた後、一条は登霞（とうか）したというものである。その後、「十善の業に依りて、万乗の位（天皇位）を感じ、往昔五百の仏に事へて、今生霜露の罪を少くしたまふ。最後の念仏かくのごとし。あに淨利（極楽）に往生したまはざらむや」と結んでいる。

『権記』には、実際に一条が臨終に際して念仏を唱え、また蘇生したことが見えるが、そのような史実を基にして創作されたものであろう。なかなか生前における個人的な宗教性や信仰を知ることの難しい一条であるが、この説話などから、極楽往生を旨とした浄土教への傾斜を窺うことができようか。これも『古事談』に見える。

次に、保安元年（一一二〇）以後に成立した『今昔物語集』には、巻二十四第四十一話「一条院失せ給ふ後、上東門院和歌を読む語」がある。内容は彰子が敦成親王の幼い姿を見て詠んだ歌、また定子が崩じる前に詠んだ歌である。『十訓抄』にも見える。

藤原忠実の談話を中原師元が保延三年（一一三七）から久寿元年（一一五四）にかけて筆録した言談聞書である『中外抄』にも、一条説話が見える。巻上―四は、藤原師実が彰子から聞いた話として忠実に語ったこととして、一条は寒い夜にはわざと御直垂（直垂袈）を推し脱いでいたというのである。彰子がそのわけを聞くと、一条は「日本国の人民の寒からむに、吾、かくて暖かにてたのしく寝たるが不便なれば」と答えたとのこと。いかにも気配りの効く一条らしい説話で、伝聞経路も信憑性があるかのように見えるが、実はこの話は、中国の孝子伝に原拠を持つものである。ただ、このような慈民説話が一条にかけて伝えられたことの意義は、別個に考えるべきであろう。この説話は、『古事談』『続古事談』『十訓抄』『宝物集』『月刈藻集』でも語られている。

巻上―八七は、東三条殿は重明親王の旧宅であったが、重明は金色の鳳凰が来て舞うと夢に見たものの、即位できずに終わった。ところが、兼家がこの邸第を領すると、一条がこの邸で誕生し、鳳輦に乗って内裏に入ったというもので

ある。夢の予兆性が、一条と関連させて語られている。鳳凰を日輪に変えて『古事談』にも見える。

卷下―三八はうって変わって、訴えをする時には賄を送るべきであるというもので、道長が一条に申請したことの裁許が遅々としていたので、『黄に時きたる硯宮』を一条に贈ったところ、すぐに裁許されたというのである。『続本朝往生伝』に見える、道長が一条に玉饌を奉つていたという記載を誤解したものであろうか。

大江匡房の晩年の談話を藤原実兼が筆録した言談聞書である『江談抄』には、三つの一条説話が見える。卷二―二七は、藤原行成に取り憑いた藤原朝成の霊に一条が気づき、「誰そあれは」と仰せて霊を止めたというもの。²『大鏡』では行成を救ったのは道長の夢想であったこと（卷三「太政大臣伊尹」と比べると、興味深い。

卷四―九九は、大江以言の「恨むらくは漢雲の子細に暗きことを」という詩が一条の叙感に与かり、藏人に補せられようとしたところ、道長や殿上人の反対で流れてしまった際に、「鷹鳩変らず三春の眼 鹿馬迷ふべし二世の情」という詩を詠んだというもの。為時の場合もそうだが、このような詩作によって人事が左右されると伝えられていること自体、「聖代」との認識によるものである。長保三年（一〇〇一）に尾張守に任じられた大江匡衡も、崇文の天皇である一条が学者を賞していることを讃えている（『本朝文粹』卷七・奏状下）。

注 藤原為時……生没年未詳。紫式部の父。

源国盛……生年未詳。九九六。

乙「次の文章は、甲に言及される『続本朝往生伝』第一話の一節である。」

源 国盛朝臣^ハ任^{ゼラレ}越前守、藤原為時^ハ任^{ゼラル}淡路守。為時
朝臣、附^{ケテ}於女房^ニ献^{ジテ}書曰、^{ハク}
除目、春朝蒼天在^{リト}眼。^{まなこニ}
主上覽^{ミタマヒテ}之、敢^{ヘテ}不^レ羞^ハ膳。入^リ夜、御帳^ニ涕泣^{シテ}而臥^{シタマヘリ}。左相参
入、知^リ其^ノ如^{キコトヲ}此、忽^チ召^{シテ}国盛朝臣、令^メ進^ゼ辞書、以^テ為^ニ時朝臣^ヲ、
任^ズ越前守。国盛家中、上下啼泣。国盛朝臣自^リ此受^ケ病^ヲ、
及^{ビテ}秋、任^ニ播磨守、猶依^{リテ}此病^ニ死^{セリ}。

丙「次の文章は、乙の類話にあたる、『今昔物語集』卷二十四第三十話である。」

今は昔、藤原為時と云ふ人有りき。一条院の御時に、式部丞の旁に依りて、受領に成らむと申しけるに、除目の時、
阙^{ケツク}国無きに依りて、成されざりけり。

其の後、此の事を歎きて、年を隔てて直物行はれる日、為時、博士には非^アねども、極めて文花有る者にて、申文を
内侍に付けて奉^{タテマツ}り上げてけり。其の申文に此の句有り、

苦学、寒夜紅涙霑^{うるほシ}襟、除目、後朝蒼天在^リ眼^ニ。

と。内侍此れを奉り上げむと為るに、天皇の、其の時に御寝なりて、御覽せず成りにけり。

而る間、御堂、関白にて御坐^{おはしま}しければ、直物行はせ給はむとて、内に参らせ給ひたりけるに、此の為時が事を奏^ウせさ
せ給ひけるに、天皇、申文を御覽せざるに依りて、其の御返答無かりけり。然れば関白殿、女房に問はしめ給ひけるに、
女房申^ズす様、為時が申文を御覽せしめむとせし時、御前御寝なりて御覽せず成りにき。然れば、其の申文を尋ね出でて、
関白殿、天皇に御覽せしめ給ひけるに、此の句有り。然れば関白殿、此の句微妙に感ぜさせ給ひて、殿の御乳母子にて
有りける源国盛と云ふ人の成るべかりける越前守を止めて、俄かに此の為時をなむ成されにける。

此れ偏へに申文の句を感じらるる故なりとなむ、世に為時を讃^ほめけるとなむ、語り伝へたとや。

注 直物……徐目の結果を改める行事。

申文……官位昇進などを望む上奏文。

丁「次の詩は、丙の「苦学寒夜紅淚霑襟」の典拠の一つと考えられる、白居易『白氏文集』巻第六十二「短歌行」である。文中には、返り点・送り仮名を省いた箇所がある。」

世人^{ムルハ}求^ム富^フ貴^キ 多^{クハ}為^{ナリ}奉^{センガ}嗜^シ欲^ニ
盛衰^ハ不^ニ自^{ナラ}由^ユ 得^ハ失^ハ常^ニ相^ヒ逐^フ
問^フ君^ニ少^シ年^ニ日^ニ 苦^{シテ}学^ヲ将^ニ干^{モヒメント}禄^ヲ
負^{ヒテ}笈^ヲ塵^ニ中^ニ遊^ビ 抱^{キテ}書^ヲ雪^ヲ前^ニ読^ム
布^ヲ衾^ヲ不^レ周^{カラ}体^ニ 藜^{レイ}茹^{じよ}纔^{わづかに}充^ツ腹^ニ
三^{ニシテ}十^リ登^ニ宦^ニ途^ニ 五^{ニシテ}十^ニ被^ニ朝^ニ服^ヲ
奴^{ニシテ}温^ニ已^ニ挟^ニ纊^ニ 馬^ニ肥^{エテ}初^{メテ}食^{ハム}粟^ヲ
未^レ敢^ニ議^ニ歛^ニ遊^ニ 尚^ホ為^ニ名^ヲ檢^ニ束^ニ
耳^ヲ目^ヲ聾^ニ暗^ニ後^ニ 堂^ニ上^ニ調^ス糸^ヲ竹^ヲ
牙^ヲ齒^ヲ欠^ニ落^ニ時^ニ 盤^ニ中^ニ堆^{うづたか}酒^ヲ肉^ヲ
彼^レ来^{レバ}此^レ已^ニ去^リ 外^ニ余^{リテうち}中^ニ不^レ足^ヲ
少^ニ壯^ト与^ニ榮^ニ華^ニ 相^ヒ避^{クルコト}如^シ寒^ニ燠^ニ
青^ニ雲^ニ去^ニ地^ニ遠^ニ 白^ニ日^ニ經^ニ天^ニ速^ニ
從^リ古^ニ無^シ奈^ニ何^ニ 短^ニ歌^ニ聽^ケ一^ニ曲^ヲ

注 布衾……掛け布団。

藜茹……葉野菜。

挟纊……綿を着る。

寒燠……寒暖。

問十七 甲の文章の空欄

I

に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 不肖

ロ 卓越

ハ 愚僧

ニ 謙遜

ホ 上乘

ヘ 理性

問十八 甲の文章の空欄

II

に入る一節として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 高貴できらびやかな
- ロ 素直で飾り気がない
- ハ 純粹であるが貧しい
- ニ 気高く物に動じない
- ホ 異能の人材をもどす
- ヘ 政務と文芸に勤める

問十九 甲の文章の傍線部1「慈民説話が一条にかけて伝えられたことの意義は、別個に考えるべき」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 寒夜に民を思い慈しむとは、いかにも一条天皇らしい逸話であるが、そのような話は史実と離れており、話の裏にある真の意味を考えなければならない。
- ロ 中国の親孝行の話が、寒夜に一条天皇が人民を思い直垂を脱いで寝たという話に変換されたことは、中国と日本において同様の背景があると考えられる。
- ハ 中国の説話に原拠を持つ、天子が民を慈しむ話が一条天皇にかこつけて伝えられたことの真の意味は、一条天皇の実像とは分けて考えなければならない。
- ニ 藤原道長の娘の彰子が、夫である一条天皇の話として伝えた、民を真摯に思う話は、伝聞経路に信憑性があり、虚言が交じる説話とは別に考えるべきだ。
- ホ 一条天皇は自分だけ暖かく寝ることを拒否して、皇后の彰子にも不便な生活を求めたが、これは人民を思う故の行動で、夫婦の不仲とは別の問題である。
- ヘ 一条天皇のこのような逸話が『古事談』など諸書に伝えられることは、理想の天子の姿を後世に示す意義があり、話の捏造とは分けて考えてもよからう。

問二十 甲の文章の傍線部2「『大鏡』」よりも後に成立したと考えられる作品を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 『宇治拾遺物語』 ロ 『狭衣物語』 ハ 『更級日記』
- ニ 『本朝文粹』 ホ 『夜の寝覚』 ヘ 『和漢朗詠集』

問二十一 甲の文章の傍線部3「詩作によって人事が左右されると伝えられていること自体、「聖代」との認識によるものである。」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 一条天皇の時代には、訴訟の際に賄賂がまかり通っており、贈答品を受け取り政治を曲げる天皇を表だつて批判できないため、後世の文人官僚が「聖代」として皮相的に表現した。
- ロ 一条天皇は、一芸に秀でた人々を重視したため、後世に「聖代」と呼ばれたが、これ以降の天皇においては劣等感を生じさせる原因となり、しばしば政務が停滞することになった。
- ハ 一条天皇は、いったん崩御したが蘇生して念仏を唱えたことから、後世に聖人として特別な存在と見られており、理想的な時代には文才を持った者が多く出現すると考えられよう。
- ニ 一条天皇を支えた文人官僚は、自らの権勢を誇示するために、外戚である藤原氏の政務への干渉を積極的に妨げたため、後世において詩作が盛んな時代を理想とすることになった。
- ホ 藤原兼家は、重明親王が金色の鳳凰が舞う夢を見た旧宅を領したが、鳳凰は文道が盛んになる予兆として知られており、ここで出生した一条天皇には「聖代」が約束されている。
- ヘ 文人貴族の理想は、文道によって政務が統治されることであり、そのような人材が活躍できる一条天皇の時代こそが「聖代」の証しであり、文人にとって賞賛すべきものであった。

問二十二 丙の文章における傍線部X・Y・Zの敬語は、次のaからdの誰を、それぞれ敬意の対象としているか。その答えの組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- a 藤原為時 b 内侍 c 天皇 d 関白殿
- イ X | a・Y | a・Z | d ロ X | b・Y | a・Z | c
- ハ X | b・Y | c・Z | d ニ X | c・Y | a・Z | c
- ホ X | c・Y | c・Z | d ヘ X | a・Y | c・Z | c

問二十三 乙と丙の文章は、同一の逸話を伝えているようにみえるが、双方の内容に齟齬がある。両者を比較した次の文の中で、正しい趣旨を説明しているものを二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 乙では藤原為時が小国の淡路守に任じられたために書を奉ったとするが、丙では關国がなかったので任命されず、翌年の直物で申文を提出したとする。
- ロ 乙では主上は藤原為時の書を一見しただけで、涙を流して臥したとするが、丙では天皇は申文を読む機会を藤原道長に奪われたため、抗議の就寝をしたとする。
- ハ 乙では「徐目春朝」として、正月の徐目で季節が春であることを示すが、丙では「徐目後朝」として、徐目の翌朝に道長が受けた衝撃を強調している。
- ニ 乙では藤原道長が参内して藤原為時の書に天皇が涙を流したことを知るが、丙では道長は女房によって天皇が申文を一見してから就寝したことを知らされている。
- ホ 乙では藤原道長が源国盛を召して辞書を書かせたとするが、丙では国盛が道長の乳母子だったことが示され、両者の人間関係に基づいた人事であったことが明かされる。
- ヘ 乙では源国盛は越前守の官を剝奪され、秋の除目で播磨守に任じられたものの憤死したとするが、丙では国盛は道長によって他の国守として優遇されたとする。

問二十四 丁の文章の傍線部4「未敢議歡遊」の返り点を、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問二十五 丁の文章の傍線部5「青雲去地遠 白日經天速」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 高官として共に詩文を交わした友情は去り、日が沈むように速やかに死を迎えるだろう。
- ロ 青雲の志を抱いた年月はすでに去ったものの、真昼の夢からはいまだ醒めることはない。
- ハ 高位高官への志はまったく失われており、盛年の日々は瞬時に天を通り過ぎてしまった。
- ニ 雲の梯子をかけて仙人になろうと試みて、白日のうちに速やかに昇天することができた。
- ホ 晴れた空を見上げると肉体は衰えていないが、燃え上がるような情熱は去ってしまった。
- ヘ 老後の隠逸生活に飽きてしまったが、悟りを得るにはいまだ時間がかかることになろう。

問二十六 甲・乙・丙・丁のいずれかの文章の趣旨と合致するものを、次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 一条天皇は詩文と音楽に優れた才能を有し、各方面に優れた人材が輩出したため、藤原道長の恣意的な政權運営にもかかわらず、後世に「聖代」と称されている。
- ロ 一条天皇の人となりを表す逸話は、説話集に数多く収載されており、後世の評価は虚実あい交じるものであるが、どちらかといえば否定的に描かれることが多い。
- ハ 藤原為時が、淡路守から越後守に叙任されたことは、天皇に申文を送って直接訴えたからと伝えるが、史実は宋国人との交渉のために越後守に任じられたという。
- ニ 藤原道長は、関白であったため宮中に自由に出入り可能で、一条天皇が見る前の藤原為時の申文に感心したため、天皇に相談せずに勝手に人事をひっくり返した。
- ホ 世間の人が富貴を求めるのは、多くは己の欲望を満足させるためのものであるが、若き日に苦学して書を抱いて雪の灯で読んだ志を思いだし我が身を正してほしい。
- ヘ 三十歳でようやく官途に就き、五十歳で宮中に仕えたものの栄華は短く、老いて醜い人生を振り返り、悔恨の念にとらわれつつ、死を意識した諸親の境地に至った。

〔以下 余白〕